

理由文の実質的・認知的読みの認知的分析－視点と接続構造－

宇野良子

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻

1 導入

Sweetser (1990) は論理的接続語 (理由、条件、譲歩等の接続語) には 3 つの領域での読みがあると主に英語の例文を用いて主張している。理由文 (理由を表す接続語を含む複文) の 3 つの読みの日本語の対応例として以下の (1) - (3) を挙げることができる。

- (1) (実質的読み) 強い風が吹いたから帽子が飛んだ。
- (2) (認知的読み) 明かりがついているからあの家には誰がいる。
- (3) (発話行為的読み) 冷蔵庫にジュースが入っているから飲んで。

Sweetser (1990) に基づくと次のような説明が可能となる。(1) のような実世界での二事態の因果関係を表す場合には接続語は実質的領域で解釈されている。(2) は「明かりがついている」という話者の知識が「あの家には誰がいる」という結論を話者に下させるという点で認識状態間の因果関係を表していると言え、認知的領域での解釈である。(3) では、発話行為の遂行を可能にする前件と発話行為そのものの後件が結ばれているので、発話行為的領域での解釈とする。この説明は結ばれる単位の違いの指摘とも言える。尚、「から」の実質的読みは日本語学でいう B 類「から」に、認知的読みは C 類「から」に対応すると思われる (田窪 [1987])。

本稿では理由を表す接続助詞「から」の実質的読みと認知的読みを分析する。まず、第 2 節では上記で紹介したような結ばれる単位の違い (事態か認識状態か) に加えて、2 つの理由文の構文としての違いが観察されることを示す。第 3 節ではその違いが何を意味するのかを解釈する。更にここで観察された理由文に関する現象が全ての論理的接続語に関する Sweetser の主張に対してどのような意味を持つかということを第 4 節でまとめる。

2 テストと結果

日本語の「から」理由文の実質的読みと認知的読みの違いは従属節のテンスと認知的モダリティの解釈に反映されることを以下で示す。その解釈の異なり方はある一定の傾向を示す。

2.1 テンス

実質的読みを持つ理由文は原因結果を表す場合 (1) と動機とそれに基づく行動を表す場合 (4) の 2 タイプがある。以下のテストには生起順序に関して制約がより少ない動機行動タイプの実質的読みを用いる。

- (4) (実質的読み)
(A: どうして森君は中国語を勉強したのかな。) B: 北京に行ったから、中国語を勉強したのだろう。
- (5) (認知的読み)
(A: 森君は中国語を勉強したかな。) B: 北京に行ったから、中国語を勉強しただろう。

テストでは実質的読み（４）と認知的読み（５）の理由文を作り、前後件の述語（下線部）がそれぞれ終止形と「た」形とる場合を考える。つまり全部で４つの組み合わせが考えられる（表１(a)-(d)）。そして、前件事態（E1）、後件事態（E2）、発話（SE）（必要のある場合に限り）の可能な生起順序の解釈をテストで割り出す。最終的にはそこから従属節の述語のテンスの解釈のあり方を導く。結果を整理するために、単文または主節の述語と準ずる特徴を持ったテンスの解釈（発話時に縛られる、主節時に縛られない）を絶対的解釈と呼ぶ。そして、逆に発話時に縛られない、主節時に縛られるものを相対的解釈と呼ぶ。結果は以下の表にまとめた通りである。

表１ テンスに関するテストの結果：述語が動的事態*を表わす場合の従属節述語のテンスの解釈

従属節述語の時制形式+主節述語の時制形式	実質的読み		認知的読み	
	可能な生起順序の解釈	従属節述語のテンスの解釈	可能な生起順序の解釈	従属節述語のテンスの解釈
(a) 「た」形+「た」形	E1 > E2	相対的 (主節のテンスを参照)	E1 > E2 E2 > E1	絶対的 (主節のテンスを参照せず)
(b) 終止形+「た」形	E2 > SE > E1 E2 > E1 > SE**	相対的 (発話時を参照せず)	E2 > SE > E1	絶対的 (発話時を参照)
(c) 「た」形+終止形	E1 > SE > E2	絶対的	E1 > SE > E2	絶対的
(d) 終止形+終止形	E1 > E2 E2 > E1	絶対的	E1 > E2 E2 > E1	絶対的

(*) 今回は述語が動的事態を表す場合に議論を限る。

(**) (b) がE1 > E2という生起順序をあらわす場合があるが、これは特別な構文として別途の説明を要する。岩崎（１９９４）を参照のこと。

2.2 認知的モダリティ

議論を分かりやすくする為、認知的モダリティの推論の主体が単文や主節述語につく時のように発話者である場合は絶対的解釈、主節主語である場合は相対的解釈と呼び整理することにする。

2.2.1 まず従属節述語につく認知的モダリティの解釈は主節に依存するか否かということを考える。「だろう」には絶対的解釈しかないという指摘がある(野田[1995])。コーパスで「だろうから」を検索した結果、今のところ実質的読みの例は皆無である。実質的読みの従属節は絶対的な視点から描かれていないことが推察される。認知的読みの例は多くあり、確かに絶対的解釈となっている。このような不生起の強い傾向を前提して、尚「だろう」を実質的読みの理由節に用いる場合はやはり相対的解釈（推論の主体は話者でない）となることを次の例文は示す。

（６）女王はその探検家が偉業を成し遂げるだろうから資金を援助した。結局探検に失敗したことは今ではよく知られているのだが。

ここではスペースの関係上詳しく扱えないが「らしい」もほぼ同様の結果を得る。

2.2.2 次に後件の認識的モダリティからの前件述語の解釈は自由か否かということを問題にする。次の例文の対とスコープの判断は田窪(1987)より。([]は文末の認識的モダリティのスコープを示す。)

(7) [彼が行ったから、彼女も行った] のでしょう。

(8) 彼が行ったから [彼女も行った] でしょう。

理由文では実質的読み(7)の場合は主節の認識的モダリティ「でしょう」から従属節述語の解釈は束縛され、相対的解釈であると言える。一方、認識的読み(8)では自由であり、絶対的解釈である。

2.3 結果のまとめ

テンスのテストで主節が終止形をとる場合(表1(c)(d))は2つの読みの違いは観察されなかった。それ以外の全てのテストに関しては2つの読みでの違いが示された上、その示し方に一定の傾向が見られた。その傾向とは「から」が実質的読みを持つときには従属節のテンスと認識的モダリティの解釈は主節のそれに依存したものとなる(相対的解釈)。一方認識的読みに於いては、従属節のテンスや認識的モダリティは独立的に解釈される(絶対的解釈)というものだった。

3 解釈

前節で確認したような理由文の実質的読みと認識的読みの違いは何を意味するのだろうか。テストは全てテンスと認識的モダリティに関するものであった。ここで注目すべきは、テンスも認識的モダリティも視点(anchor point)を持つ表現であるということである(Langacker [1991]を参照のこと。)。つまり、2.3でまとめた傾向は次のように言い換えることができる。実質的理由文では前件(従属節)の視点は後件(主節)、後件の視点は発話の場にある。一方、認識的理由文では前後件の視点とも発話の場にある。

メンタルスペースの概念が上記の解釈を詳しく扱うのに有効である。メンタルスペース理論はFauconnier (1985, 1994)により提唱された。メンタルスペースとは我々が話したり、考えたりする際に作られる部分的な構造で、談話や知識の分割に有効に働く(Fauconnier, 1997)。例えば、「明日雨が降ったら、休もう。」という文に関しては、「明日雨が降ったら」という条件節が前後件が成り立っている仮想的なスペースを構築する。そして、この仮想的スペースをはじめとしたスペースはデフォルトで会話のはじめに構築される基本スペースの中に構築されていく。基本スペースとは話者の知識であり、話者にとっての現実である。

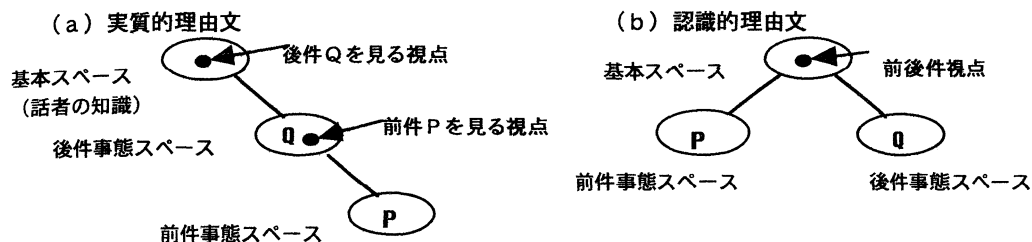
メンタルスペースの概念を用いることで視点と話者の知識との関係をテンスや認識的モダリティから導くことが出来る。(特にメンタルスペースを用いたテンスの研究に関してはCutrer(1994)を参照のこと。)

理由文の実質的読みの場合、後件事態のスペースから前件事態を見ている。結果的には両事態スペースとも話者の知識内に存在するものの、後件事態スペースと前件事態スペースは強い繋がりをもっており前者が後者を閉じ込めている形になっている。そして、話者の知識から直接前件事態に関係を持つことは難しい。

認識的読みの場合は話者の知識(基本スペース)の中に前件事態スペースと、後件事態を含むスペースがある。因果関係は話者(基本スペース)を介していると言える。図1は以上を図示したものである。表記法は

Cutrer (1994) に基づいている。図中、階層の上にあるスペースは下にあるものを含むことを意味する。

図1 理由文「PからQ」のメンタルスペースの配置



まとめると、理由文の実質的読みでは前件の視点が後件にあり、話者からは直接関与不可能なところに前後件間の関係はあるといえる。つまり、因果関係は一つのまとまりとなっており話者は介入できないという述べ方である。認知的読みは前後件の事態がともに話者（発話の場）から構成されているので二事態を「因果関係」によって結ぶのは話者であるという述べ方である。

4 まとめ

冒頭に述べた通りSweetser (1990) は理由、条件、譲歩等の論理的接続語には3つの領域での読みがあると主張し、その主張を前提とし現在でも多くの研究がなされている (Cutrer [1994], Sweetser [1996], Dancygier & Sweetser [1996] 他)。本稿では、「から」を含む理由文の場合には2つの読みの違いが結ばれる単位の違いに加えて視点とそれを反映した接続構造の違いに結びついていることを示した。これは理由文だけの特色である。3つの読みの違いがどの接続語でも同様に観察されるわけでは無いことは各種接続語の意味と3つの領域の相互関係のより詳細な研究の必要性を示す。

主要参考文献

- Cutrer, L. Michelle. 1994. *Time and Tense in Narrative and in Everyday Language*. Ph. D. diss., University of California, San Diego.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser. 1996. "Conditionals, Distancing, and Alternative Spaces", Goldberg, Adele E. (ed) *Conceptual Structure, Discourse and Language*. Stanford: CSLI Publications. 83-98.
- Fauconnier, Gilles. 1985, 1994. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. Cambridge: MIT Press.
- 岩崎卓 1994. 「ノデ節、カラ節のテンスについて」、『国語学』179. 103-114.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar Volume II*. Stanford: Stanford University Press. 240-281.
- 南不二男 1993. 『現代日本語文法の輪郭』、大修館書店。
- 永野賢 1952. 「『から』と『ので』とはどう違うか」『国語と国文学』29-2。
- 野田尚史 1995. 「現場依存の視点と文脈依存の視点ー日本語の複文・連文でボイス・テンス・ムード形式がとる視点ー」、仁田義雄編『複文の研究(下)』、くろしお出版。327-351。
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, Eve. 1996. "Mental Spaces and the Grammar of Constructions", Gilles Fauconnier and Eve Sweetser (eds), *Spaces, Worlds, and Grammar*. Chicago: University of Chicago Press. 318-333.
- 田窪行則 1987. 「統語構造と文脈情報」、『日本語学』6-5. 37-48。